「ぶっつけ本番」

昨日は京橋でトヨタ系販売店の OB 会を3人で行なった。

この会は、私が退職した年に始まったので35年の歴史があり
当初は40人を超えていたが、
年々、参加者が減って、ついに3人になった。

幹事の一つ上の先輩が世話役で、参加者に声かけをしてくれているが
徐々に、病気などの理由に減ってきたのだ。

今回は、85才の大先輩と幹事の先輩、そして、私の3人。

お昼に京橋に集まり、まず、幹事が席を予約してくれた居酒屋でランチして
その後、近くのジャンカラに行き5時過ぎまで3人で歌いまくった。

私は、新曲（？）として太田裕美さんの「木綿のハンカチーフ」を
ぶっつけ本番で歌った。

なぜ、「木綿のハンカチーフ」なのかと言えば、
朝のモーニングで新聞コラムに太田裕美さんが亡くなっていると書いてあり
都会へあこがれる若者と地方に残る恋人の哀愁を歌って
最近の一極集中に一石を投じていたので
思い出してカラオケで歌ってみたのだ。

メロディは記憶しているが、単調なリズムの中で歌詞を強調する
太田裕美さんのようには行かなかった。

なにせ、「ぶっつけ本番」、
それも、テレビやラジオで聞いただけという危うさだった。

それでも、厚顔無恥な私は歌いきり
先輩たちも義理（？）で拍手してくれたので助かった。

調べると‘75年の曲なので、50年前のヒット曲で
さすがに、誰もが共感して記憶に残っていた。

まぁ、50年前のヒット曲だから歌えたが、
最近、覚える歌の殆どは初めてというのが多いので
「ぶっつけ本番」ではムリなので、
結局、懐メロ系になってしまう。

4年前に大動脈瘤の手術で人工血管になって、
体力が低下したのでカラオケに行かなくなったが、
それまでは、昼休みを利用して一人カラオケを楽しんで
主に三波春夫さんの歌謡浪曲を次々と覚えたという程の
カラオケ愛好家だった。

文書作成でも「推敲」が必要なように
歌を覚えるにも何度も繰り返して微妙な表現を工夫する
ということが大切だが、
一度、覚えると例えば、風呂で鼻歌的に歌うようになり
自分の癖が色濃くなり原曲から少し離れてしまう
ということになってしまうのだ。

それが「自分流」と言えば、それまでだが、
やはり、カラオケで伴奏がつくと物足りなくなるのも事実だ。

今回のようにひと様の前で歌うには、
鼻歌的になっている曲は、メロディはほぼ大丈夫だが、
表現として、伸ばす箇所や強弱を再チェックすることが大切で
これをクリアしないと語りかけているのと大差なくなる
という事に再確認した。

但し、原曲のプロが示す表現力を真似ようとしても
例えば、女性独特の響かせ方は男性には難しいので
男性のものでも独自の表現が必要になるが
これが自分だけに終わらないように注意している。

「木綿のハンカチーフ」は
「恋人よ～」から始まり、殆どのフレーズの語尾が強調されているが
それぞれで少しずつ違っているので

歌詞の理解度がポイントになる。

「一人カラオケ」なら、余り意識しなくても自己満足で済むが
今回のように、幾ら先輩たちと言っても、聞いてもらうので
それなりの工夫を事前にイメージしておくことがポイントだった。

まぁ、「ぶっつけ本番」と雖も、これ位の配慮をして
スマホで数回、原曲を聞いて強調点を確認しておいたので
２人の先輩から拍手を頂けたという具合だった。

これ位の準備で行なう「ぶっつけ本番」の方が、
意外に緊張感があって、メリハリがついて効果的だったので
何回も歌いなれるよりもよかったかも知れない。

そういう意味で、プロの歌手はアカペラでも聞かせる表現力を持っているので
大したものだし、どんな場所でも聴衆を惹きつけるのは「さすがプロ」ということで
レベルの違いを実感している。

まぁ、所詮、素人なので、最低でも鼻歌で楽しめるようになって
「カラオケ」で「ぶっつけ本番」でも厚顔無恥で歌えるのは
それなりの楽しみ方と自己満足している。